『日韓古代土器様式の研究』

ー基礎作業としての「新羅王京様式」の提唱ー

重　見　　泰

本論は、日本の特質を理解し、東アジアの中の日本という位置づけ・存在を理解するために、その比較研究の手段としての編年構築を目的とするものである。対象としたのは韓國新羅の土器であり、対象とする時期は、日本のいわゆる歴史時代、7 世紀以降であり、律令制の導入・整備という背景の下で土器様式がいかに発展したのかという点に主眼を置いた。

韓國考古学では、この時期以降、時代が降るにつれて研究対象から外れるようになり、研究者も研究もほとんど無くなってしまう。このため、考古資料に歴史性を持たせるための編年作業も進んでいない。そこで、基礎作業として韓國新羅の編年を組み立て、土器様式の変化とその背景を考察した。これまでの研究史を概観し、新羅の三国統一以前から以後にかけての中心地における土器様式設定の必要性を述べて「新羅王京様式」を提唱し、7 世紀頃から出現する椀類の型式組列を中心に、その組合せや消長から四つの様式を設定した。これらは不確定要素を多く含むものであり、今後の検証作業によって補整・補完されねばならないが、土器研究の基礎、延いてはこの時期以降の韓國考古学研究の基礎を用意することができたと考える。

その新羅王京様式出現・変様は、中国大陸に出現した統一王朝とその対外政策による朝鮮三国の支配領域問題の深刻化という、当時の国際情勢を反映したものであり、また、国内の支配体制の変質・変化という国内情勢を反映したものであった。新羅王京様式は、発展していく中でその性格を変えてい

くものでもあった。

ここで設定した土器様式の変化は、新羅と日本とで非常に類似するものであり、そこには中国の動向を中心とした朝鮮三国・日本を取り巻く国際情勢が大きく作用し、律令制の導入・発展が影響していた。この共通した国際情勢・契機を反映しつつも、朝鮮（新羅）と日本とはそれぞれの国情に因った様式展開を見せるのである。

この時期においては、各国の様相を理解しようとするならば近隣諸国との関係を無視しては成し得ないのであり、内外からの視点が必要不可欠である。